フッサール真理論の地図

鈴木 俊洋

序

フッサール現象学において真理とは何か。結論を先に述べるならば、フッサールにおいて真理とは第一義的には「志向的対象が自体所持において根源的に与えられている」ことである。一般的に言われる言語表現としての命題の事実との合致という意味の真理概念はそこから派生したものである。しかし現象学における他のほとんどの中心概念でそうであるように、ここでも、「〜は〜である」式の陽的定義は、フッサール真理論について知ろうとするものが発する「フッサールにおいて真理とは何か」という問いに対する解答としてはあまり意味をなさない。フッサールにおける真理概念の真正な姿は、真理概念、あるいはその定義に使われる諸概念が、フッサール現象学の中で他の諸概念といかなる関係をもつのかを把握したり、現象学という体系内でのその概念がいかなる位置を占めるのかを確認したりすることによって初めて明らかになる。

いわば、フッサール現象学全体の中の真理概念付近の地図を描くことが、真理概念の把握のためには必要なのである。現象学における真理概念とは、その概念付近の諸概念のあり方をさまざまな角度から眺めつつ、その概念付近の地図を作ったり、そしてそれを少しずつ拡大したり精密にしたりしていく中で、徐々にその姿を明らかにしていくものである。以下に述べようとするものは、そのための一助となることを企図したものである。

1 『形式的論理学と超越論的論理学』（以下、FTL と省略。）

フッサールは、晩年、それぞれの角度からの現象学への入門書を意図して３冊の著作を残した。その一つ、論理学から現象学への道が FTL である。論理学とは真理についての学である。従って、そこで辿られているのは、真理についての考察を経由した現象学への道である。

《フッサールの論理学考察の基本姿勢１　意識の志向性に基づいた論理学の考察》

フッサールの論理学考察の基本的目的は、形式的学問である論理学に意味と本質を与えることである。それは現象学の発端となった動機でもあった（LUP §71）。

『論理学研究』（以下『論研』と省略）序説の末尾で掲げられたこの目的は、ＦＴＬ第一部において実践されることになる。形式的学問に意味と本質を与える、とはいかなることか。この基本姿勢は、当時の形式的学問（論理学や数学）において主流となりつつあったヒルベルト・プログラムの公理的手法を意識して掲げられたものである。しかし、フッサールが意図していたのは、意味を欠いた純粋に形式的な体系として構成された公理系のようなものに、経験や直観などとその体系をつなぐ何ものかを、つまり意味の理論を、付加するようなことではない。

形式的学問に意味と本質を与えるという言葉によってフッサールの意図していた

のは、一言で言えば、形式的学問を主観性の行為として捉えなおすということである。つまり、論理学や数学といった形式的学問を、論理学者や数学者といった人間（あるいは意識、主観性など）が遂行する行為という形で眺めなおし、そこで何が起こっているのか、つまり、主観性の遂行する活動としての形式的学問とは何なのか、を考察することである。

主観性の行為として論理学を考察するとは、主観性が認識を遂行する際に必然的に付随する志向性という構造に基づいて論理学を考察することである。志向性とは、意識が認識活動を遂行するさいに、認識される当のものである「何か」を志向的対象という焦点（統一的契機）とすることで、多様に変化する直接的に与えられるものを統一して「知る」という構造である。

つまり、形式的学問である論理学に意味と本質を与えるということの第一の意味は、論理学を意識の志向性という統一化的把握構造に即して考察し、そこであきらかになる論理学の姿を提示することである。

《フッサールの論理学考察の基本姿勢２　真理と体系性について》

フッサールにおいて広義の論理学とは、全ての学問的知識に必然的に付随している体系性について一般的に考察することである。その意味で広義の論理学は学問論 Wissenschaftslehre（科学論、知識論）と同義である。FTL にならって、さしあたり常識的かつ伝統的な見地に立つと、たいていの場合学問的知識は言語を使って表現される。だとすれば、論理学の対象とすべきは言語を使って表現された命題の持つ体系性である。さらに学問的知識がなぜ体系性を持つのかといえば、それは、その知識が真であるために体系性を必要とし、学問的知識は真であることを求められているからである。だとすれば、真理も論理学の対象となるべきものである。

それでは、学問的知識の体系性と真理性が論理学の対象とすべき二つのテーマとなるのだろうか。確かに、今日では、体系性と真偽の問題は異なる二つの問題とされるのが一般的である。公理的手法による数学や論理学におけるように、ある知識の体系はその体系内の諸命題の真偽とは別に体系性自体として論じることができる。しかし、フッサールにおいて体系性は常に真理との密接な関係のもとに捉えられる。そして、論理学の目的はあくまで真理であり、体系性は真理を実現するために必要とされるものに過ぎない。歴史的にみれば、上で述べたような体系性と真理を切り離して個別に論ずる現代一般的な視点は、ヒルベルトの公理的手法に至って確立されたものである。そして、フッサールの論理学考察の目的は、まさにそのヒルベルトの公理的手法によって変化しつつあった形式的学問のあり方に意味と本質を与えようとするものであった。

このような視点から見ると、フッサールの掲げた形式的学問に意味と本質を与える、という目的の第二の意味として、真理と体系性を切り離し体系性そのものの学として発展しつつあった形式的諸学問に、真理と体系性の必然的な関係を取り戻し、形式的学問の学問論における本来の位置を明らかにしようとすることだと解釈できる。

《ＦＴＬにおける論理学の三層区分》

形式的学問に意味と本質を与える、という言葉の一つ目の意味は、①形式的学問を意

識の志向性に基づいて意識の遂行する行為として捉えなおす、ということであり、二つ目の意味は、②形式的学問において真理と切り離された体系性に真理との密接な関係を取り戻す、ということである。この二つの目的を実践する中で読者を現象学へと導入しようとするのがFTLである。そこで、論理学は三つの層に区分されて論じられる。

先に述べたように広義の論理学とは学問論、あるいは知識論と同義である。知識はさしあたり言語表現によって命題として表現され、それは真であることを目指す。つまり、学問論としての論理学の最終的目的は、どのような命題が真であり、どのような命題が偽であるのかを規定することである。理想的には、全ての命題について、その命題が真であるか否かを（個別学問領域に限定されない）一般的な形で規定し尽くすことができればそれで学問論としての論理学の目標は達成されることになる。従って、真理へと向かっている諸命題はいかなるときに目的地である真理へと到達できるのか、そのための条件を規定するのが学問論としての論理学の課題であることになる。

そのような論理学の姿を描いてみせるのがFTLの論理学の三層区分の記述である。論理学には三つの層があり、三つの層はそれぞれの条件設定によって真理に至ろうとする命題を篩い分ける。それは諸命題から真なる命題を篩い残していく作業のフローチャートである。

そして、三層の条件は、意識の志向性の持つ統一化的な把握構造に即して設定される。つまり、その条件は、ある言語表現が与えられたとき、いかなるときに志向的対象としての事態を定立するような作用が成立するか、という視点から設定されるのである。言い換えれば、ある言語表現が、いかなるときに一つの志向的対象のもとに統一されて把握されることになり、いかなるときにその統一が壊れるのか、という視点から設定されるのである。

このように設定される篩い分け条件によって目指されている真理とは何かといえば、それはその篩い分け条件を満たすものに他ならない。つまり、この時点においてさしあたり、フッサールにとって真理とは「ある事態を志向的対象として定立するような志向的体験が成立すること」に他ならず、言語表現がそれを成立させるための条件を規定するのが論理学である。ただし、後に見るように真理概念の真正な定義のためには、これにさらなる条件が加わることになる。

そのような観点から論理学は以下の三つの層に分けられる。

①純粋論理文法学：条件：言語的表現としての命題の構成分肢のつながり（集まり方及び順序）がある一定の条件を満たしていないとその言語表現は統一されない。

この層で「緑はあるいはである。」とか「ソクラテスはかつ三角形」のような言語表現が篩い落とされる。それは、一般的な言い方で「文法的に間違っている」とされる命題を真理へと至る道から排除する層である。このような統一の条件で命題を篩い分ける論理学の層（あるいはその条件を規定する学的考察は）「純粋論理文法学」など[1]と呼ばれる（FTL §13）。

---

1 他に「判断の形式学」「意味の形式学」とも呼ばれる

②無矛盾性の論理学：条件：命題の各分肢同士が矛盾していると統一されない。

この層は、①の条件をクリアしたものの中から「ソクラテスは三角形であり、かつソクラテスは三角形でない」「全ての素数は奇数であり、かつ 2 は偶数であり、かつ 2 は素数である。」（一つの命題として考える）のような、一般的に、自己矛盾していると言われる命題を篩い落とす層である。このような統一の条件で命題を篩い分ける論理学の層（あるいはその条件を規定する学的考察は）は「無矛盾性の論理学」[2]と呼ばれる(FTL §14ff.)。

これら二つの層はいわば、言語表現の形をとった命題が真理へといたるための必要条件を扱う論理学の層だといえる。

③真理の論理学：上記①②の条件を満たしただけでは、真なる命題のみが残らない。残っているのは、例えば、「ソクラテスは三角形である」「正義は黄色くない」などといった「つじつまの合わない命題」と「ソクラテスは日本で生まれた」「光は時速 15 キロで進む」などといった「事実と照らし合わせて真でない命題」である。これらの命題を非統一としてふるいおとす論理学の最後の層をフッサールは「真理の論理学」と呼ぶ。

ＦＴＬにおける論理学の三層区分の考察によって明確にされているのは、形式的学問が真理と切り離して論ずる体系性とは、真理へと至るための必要条件である①②の条件を詳細に規定したものに他ならない、ということである。具体的には、例えば Chomsky の変形生成文法論は①の条件について、命題論理学や述語論理学は②の条件について、領域を絞って機械的に規定することを目指す企図として捉えることができる。これによって形式的学問が主題とする知識の体系性が真理を第一主題とする学問論としての論理学においていかなる位置を占めるかは明らかになるが、その考察は、真理の論理学という新しい論理学の分野を生み出すことになる。

三層区分によって結果的にフッサールの描く論理学の姿は、形式的体系そのものについての論理学（①②）と真理の論理学（③）に分かれることになるのだが、ここで、このようなフッサールの論理学の三層区分の記述が、それに対立する形式的学問の立場と何が違うのか、どこが競合し、どこが同調するのか、というありうべき問いに答えておく必要があろう。フッサールの学問論としての論理学の構想は、「哲学の一分野である論理学として」真理の問題と体系性の問題を志向性という一つの枠組みに即して統一して把握することを目指すものである。しかし、形式的学問についての哲学的考察のあり方と形式的学問そのもののあり方は別の問題である。実際、フッサールは自らの論理学の構想を技術的に使用できる形へと彫琢していこうという意図は持っていなかった。さらに、技術的な面では、方法論的に一旦真理との関係を切り離すことによって知識の体系性そのものについての理解は飛躍的な発展を遂げることはフッサール自身が認めるところ(LUP §71)でもあり、たとえば現代数学の歴史はそれを如実に証明している。さらに、真理の問題についても体系性そのものの理解が進むことで新しい考察の枠組み

[2] 他に「整合性論理学」「純粋分析学」とも呼ばれる

が発生する可能性もある。フッサールが論理学の三層区分という構想で目指したものは、そのような発展の可能性を否定することではなく、上のような姿勢をとる形式的学問に対し、その姿勢があくまで技術的な方法論上のものであることを自覚させ、その研究成果が本来的な学問論において占める位置を知るように促すことである。その意味でこの構想は、形式的学問の成果はそれとして認めながら、それに意味と本質を与えるもの、なのである。具体的には、個人的に親密であったヒルベルトに対するフッサールの推奨と批判の入り混じった態度はこのようなフッサールの形式的学問観をよく反映している。

２　真理の論理学

《現象学的真理概念》

それでは、真理の論理学とは何か。論理学の三層とは、諸命題が真理へと至るために満たさねばならない条件をチェックするためのフローチャートであった。上でその条件設定を述べる際には、さしあたり、真理とは「志向的体験が成立すること」であるとし、命題が真理へと至るための条件を志向的体験が成立するための条件とした。しかし、実はこれだけでは真理の定義には不十分である。

「真理の論理学」の層においてふるい落とされるべき命題は、つじつまの合わない命題（たとえば「ソクラテスは偶数である」）と事実に照らして真でない命題（たとえば「ソクラテスは日本で生まれた」）であった。前者について、その言語表現が、それを受容するものの意識において、志向的対象として事態を立てるような作用を成立させるか否か、についてはここでは保留するとしても、後者に関してはその言語表現がある志向的体験を成立させることは明らかである。

ここで真理のための条件には、「ある志向的対象を定立する作用の成立」に加えて、成立した作用が「志向的対象が自体所持において根源的に与えられている」ような作用へと遡行できるようなものであることが加わる。そして、真理とは「志向的対象が自体所持において根源的に与えられていること」そのものを指すことになる。

FTL でフッサールは、真理には二つの意味があると述べる(FTL §46)。一つ目は、①命題が事実と合致しているという一般的な意味の真理である。もう一つの意味が、上で述べた、より根源的な真理の意味であり、②「（事態という）[3]志向的対象が自体所持において根源的に与えられていること」という意味である。①の意味は、②の意味の真理から派生したものであり、厳密にはそれは、「ある命題が②の意味の真理へと向けられていること」、あるいは、「②の意味の真理に即して比較検討 angemessen されている、ような命題の性質」という意味である。

《事態と「言語を介して」という与えられ方　言語的判断の特殊性》

[3] ここでは、事態が話題となっているため（そして論理学においてほとんどの場合がそうであるのだが）、「事態という」と付加したが、これは本質的なことではなく、一般的にはこのことは志向的対象が「事態」である場合に限定されない。現象学真理論は、真理とはあらゆる志向的対象について、それが自体所持において与えられていることだとするものである。

それでは、「自体所持において根源的に与えられている」とはいかなることか。これを言い換えてフッサールは、「経験される基体 Substrat それ自体に即して産出する能動性の中で根源的に与えられる」とも言う(FTL§46)。

このことを理解するために、少し角度を変えて、事態という志向的対象と真理の関係について考えてみたい。

ここまでの論述では、さしあたり便宜的に言語によって表現された「事態」を「命題」と呼び、命題が真理を目指すという言い方をしてきた。ここで、言語表現と事態の関係を規定しておかねばならない。言語表現とは事態という志向的対象の与えられ方の一つである。そして、一般には（そして、フッサールにおいても傾向としては）「言語を介して」という与えられ方で与えられる「事態」を特に「命題」という。

「言語表現を介して」という志向的対象の与えられ方は、そのさまざまな与えられ方のうちで最も「空虚な与えられ方」である。つまり、志向的対象としての事態は、さまざまな他の「より充実した与えられ方」を持つのである。この点について、Sokolowski は、「判断」[4]が成立する三つの特徴的な場合を例に説明している[5]。

判断が成立する三つの特徴的な場合

①充実の前にされる判断：例えば数十年前における「月の表面は硬い」という判断。この判断はそのことを問うためにされる判断、であり、そこで定立される事態は、問われるべきものとして立てられる。

②充実の飽和とともにされる判断：ある人が月の表面を歩きながらする「（本当に）月の表面は硬い」という判断。

③充実の後にされる判断：今日される「月の表面は硬い」という判断[6]。

①の判断は空虚であるのに対し、②③はそれに比べて充実している。事態の与えられ方には他にも、「話を聞いて内容を把握しただけ」という最も空虚なものから、それを頭の中で生き生きと思い浮かべながら把握したり、絵や写真などで事態を確認しながら把握したり、といったさまざまな場合が考えられる。これらは、全て一つの事態という志向的対象の与えられ方の違いによるものである。『論研』においてそれら諸作用は、同じ対象を同じ様相で立てるが充実度が異なる諸作用として扱われる[7]。さらに、そこでは、事態の真偽の検証という作業は、「言語を介して」という様相で空虚に事態を定立する作用から、より充実して事態を定立する作用へと充実化の増強系列を辿っていくこととして規定される。

ここでこれらの事態定立作用を新しい志向的体験の成立（あるいは志向的対象の発生）という観点から考えてみたい。まず、③は②においてある事態を定立する作用が成立した後にその変様としてできあがるものであるためここでは無視できる。①と②にお

[4] ここで言う判断とは厳密には「事態を志向的対象としてそれが言語表現を介して与えられるような志向的体験」のことである。

[5] R. Sokolowski, "Husserian Meditations", p.234.

[6] Sokolowski によれば、三つの場合の判断は各々その末尾に①は"？"、②は"！"、③は"．"がつくような文章として表現される。

[7] 厳密に『論研』の用語法に従えば同じ「質料」と同じ「性質」である。

いては、ともに新しい事態を定立する作用が新たに成立している。しかし、現象学的には本来的な意味での発生は、②の場合のみである（「本来的な発生」については後に述べる）。①の発生は、ここでは詳しく述べないが、「言語を介して」という志向的対象の与えられ方の特殊性よって可能となる非本来的な発生である(EU§67.68.69)。本来的発生の②の場合では、「発生直後かつ変様以前」というのが、その作用が最も充実している状態であるのに対し、非本来的な①の場合では発生した当初から空虚な与えられ方において事態が定立されることになっている。そして、言語的コミュニケーションの発達した今日、かなりの場合において事態はこのような非本来的な発生によって発生するといえる。

さらに、このような観点から事態と真理の関係を考えてみる。

例えば、他人からの伝聞による事態の発生について考えてみよう。ある人から、「庭に咲いている花は赤い」と聞いたり、ある人の書いたその文章を読んだりした場合、受け手の側には、一つの新しい志向的対象（事態）が（非本来的なかたちで）発生する（上の①の場合に相当）。それは、発生した当初から空虚な与えられ方を持つものである。受け手は、そののち庭に出て咲いている花を見たりして、その作用を充実することによって、その事態が真であることを確認するわけであるが（『論研』の図式）、そこでされている作業は、厳密には、話し手側の歴史の中にある本来的発生の跡を辿るという作業である。つまり、空虚な作用の充実とは、発生の当初から「言語を介して」という空虚な与えられ方を持つような形で非本来的に成立した作用が、それが本来的発生によって成立した直後の状態へと近づいていくことなのである。

このようなケースにおいて最初に発生した事態は、現象学的には非本来的に発生した事態である。しかし、それにも関わらず、事態の真偽が問題となる場合、このようなケースが圧倒的に多いことはすぐに分かる。（②のように本来的に発生した事態について、それを定立する作用の変様が起こる前の段階で、その当の人がその真偽を問題とすることは現実には極めて稀であろう。）

さらに、学問的知識になると、そのような語り手としての主観性の存在すら想定できない場合がほとんどである。例えば、「土星の表面はかたい」という事態を本来的なかたちで産出した歴史を持つ主観性は（現段階では）実際には存在しない。そのような場合、上で述べたような真理への遡行構造が構造としてのみ取り出され、その構造にそくして実際には歴史上存在しない本来的な発生の過程を辿る、というかたちで検証が企図されることになる。

空虚な形で与えられる事態の真偽を確かめるために人が溯ろうとする目標地点は、その事態が本来的な発生において発生した直後の状態である。つまり命題が真理を目指しているときに目指されている「（ある事態が）自体所持において根源的に与えられている状態」というのは、「その事態が本来的に発生した直後の（変様される前の）状態」のことである。ある事態が新しく定立された場合、その発生が本来的な歴史を持っている場合には、その新しく定立された（変様を被る前の）状態そのままが「自体所持において根源的に与えられている」状態である。そして、その場合現実には真偽が問題となることは極めて稀である。真偽が問題となるのは、その事態が非本来的に発生した場合

のみであり、その場合、真偽の確認とは、想定されるその事態の本来的発生の跡を辿ることによって「事態が自体所持において根源的に与えられる」ような作用へと近づこうとすることである。

3　本来的発生の局所的構造と大域的問題

それでは、発生が本来的な歴史を持つとは、いかなることか。本来的な発生とは何か、という問いには二つの答えが必要である。一つは、その本来的発生の過程の局所的構造についての規定であり、もう一つは本来的発生の出発点はどこかという大域的な問題である。

《発生の局所的構造》

発生の局所的構造とは、既存の志向的対象から新しい志向的対象が発生する過程の構造のことであり、それは志向性の本質構造に由来するものである。この過程の分析は、FTL による導入に続く現象学的な各論研究として計画された『経験と判断』の主要テーマである。

既存の志向的対象からの新しい志向的対象の発生は、「反省 Reflexion」によっておこる。

例えば「庭に咲いている花は赤い」という既存の事態に否定というカテゴリー形式が加わり「庭に咲いている花は赤くない」という事態が発生する過程を考えてみよう。まず、「庭に咲いている花は赤い」という事態を空虚に立てる作用があり、それを充実しようとする過程でその作用は幻滅化 Enttäuschung されることによって同じ事態を否定的様相において定立する作用へと変様する。そののち、「庭に咲いている花は赤い」という事態を否定様相で定立する体験を認識財産として保存するために、その定立の様相（否定様相）をも含んだ形でニュートラルな様相で事態を立てようとする意志が働く。その意志によって否定様相も含んだ作用全体へと視線を向けかえるという「反省」が遂行され、その視線の向けかえによって否定というカテゴリー形式を含んだ「庭に咲いている花は赤くない」という事態をニュートラルな様相で定立する作用が発生する[8]。

また、狭義の対象から事態が発生する過程を考えて見ると、例えば、机の上の丸く赤いりんごを定立する作用（知覚など）において、ニュートラルな様相でそれを立てる作用が、それを「丸いという性質に注目して」という様相で立てる作用へと変様される。そこで、反省によって視線をその様相を含んだものに向けかえてそれをニュートラルな様相で定立することによって、「このりんごは丸い」という事態が発生する。

このように、本来的発生の局所的過程は「反省」の概念を軸に分析される。この点についてはここではこれ以上詳しく論じないで確認されたものと仮定する。

《発生の大域的問題》

本来的発生に関して、局所的構造はそれなりにまとまった分析となっているのとは

[8] 「否定」というカテゴリー形式の付加の詳細については拙論「否定判断論再考」（現象学年報 16）を参照。左論文での図式は、他のカテゴリー形式にも少しの修正で適用できるものである。

対照的に、その大域的問題に対するフッサールの解答はあいまいである。

大域的問題とは、言い換えれば本来的発生の出発点の問題である。上記で確認された（と仮定した）発生の局所的構造にそくして起こる発生が本来的な発生である、のだとしたら、本来的発生とは、その発生の出発点として一つの最終審級となるような「アルキメデスの点」を要請する。つまり、ある「アルキメデスの点」があり、そこから一定の構造を満たす発生の図式に従って、順次発生するという過程こそが本来的発生の過程であり、そのような発生の歴史を持つ事態（の発生直後の変様前の姿）こそが自体所持における事態の姿である、というように。

この問題についてフッサールの態度はあいまいである。

知覚の理論負荷性の現象を鑑みればその出発点が知覚ではないことは明らかである。それでは、それより下層に信頼すべき意識の層があるのだろうか。「根源的に受動的な層」と呼ばれる意識の最下層の活動層へと分析を進めていくフッサールはこれらの意識の層に出発点を求めたとも考えられる。ところが、『危機』においてフッサールは、「生活世界」というもう一つの出発点の候補を提案している。そのいずれをとるにせよ、フッサール自身は、出発点の問題を明示的に満足のいく形で答えてはいない。

ただ、解答の示唆は与えられている。それは FTL において語られる「明証性の基盤の無限の改訂可能性」という考え方であり、これを『危機』における「明証性の基盤としての生活世界」という概念と合わせて考えると、フッサールは、その表面的な強い表現とは裏腹に、「アルキメデスの点」の探求を放棄したのであると解釈できる。内容を持ったあらゆる命題（つまり、形式的命題を除いて：これについてはすぐ下で論ずる）が、その真偽について相対的であることは、全体論や破壊的懐疑主義を持ち出すまでもなく今日の哲学では常識とさえ言える。そして、そもそもフッサールが防がねばならなかった（そして我々が防がねばならない）真理の相対性とは、あらゆる意味の真理の相対性ではなく、「全ての命題の真偽は相対的なものであり人間の行う真理を求める学問的活動は全て無意味なものである」とするような「破壊的相対主義（懐疑主義）」へとつながる相対性である。

そう考えると、「生活世界というさしあたりの明証性の基盤」と「その無限の改訂可能性」という出発点についての考え方は、「さしあたりの明証性の改訂可能性」ということで、「アルキメデスの点」に基づいた真理についての「自己欺瞞的な絶対主義」を防ぐとともに、「無限の改訂の中で真理へと向かう人間の努力の方向性の確保」によって、「破壊的な相対主義（懐疑主義）」をも防いでいるといえる。

付　《形式的命題はなぜ必当然的に真か》

上述において、私は事実的内容を持った命題（あるいは事態）について真偽は相対的であると述べ、それを許容した。しかし、命題の中にはそうでない一群の命題が存在する。それは（狭義の）論理学や数学の命題に代表される「形式的命題」と呼ばれる諸命題であり、それらは必当然的に真だとされる。

形式的命題が必当然的に真だとされるのは、それが上で挙げたような出発点の問題を持たないからである。なぜなら、それは、（事実的内容を持った命題のように、志向性の本質構造に即してある出発点から発生した命題ではなくて）志向性の本質構造「そ

のものに関する」命題だからである。

論理的に真なる命題とは、カテゴリー形式のみを含んだ命題である[9]。そして、既にある事態にカテゴリー形式が加わって新しい事態が発生する過程の構造は、発生の局所的構造の分析によって確認されるように意識の志向性の本質構造に由来するものである。そのような局所的構造によって付加されるカテゴリー形式のみを含む論理的に真なる命題は、根源的発生の出発点の問題とは無関係である。それはその真理性を、カテゴリー形式の付加、という志向性の本質構造に根ざした発生の局所的構造のあり方のみに負っているからである。従って、『経験と判断』でされているような志向性の本質構造に根ざした発生の局所的構造の分析が、本当に志向性の本質構造に根ざしたものであることを認めるならばそれによって、形式的命題は必当然的に真であることは保証されるのである。

さらにそのような志向性の振る舞いをその本質構造に由来するものであると認めるならば、あらゆる認識において、志向性はそのような本質構造を持ったものとして働いているのであるから、その本質構造について言及しているそれらの命題は、「超時間的（あるいは無時間的）」ではなく、「全時間的（あるいは汎時間的）」に真なる命題であることになる。

＊省略記号　LUP:『論理学研究序説』　FTL:『形式的論理学と超越論的論理学』
EU:『経験と判断』（数字は全て節番号）

[9] 数学における真なる命題がそうであるかは若干の説明と考察を要する。